

医薬・医療と「日中連帯」

——岸田吟香の諸活動を中心に

はじめに

「前世紀の間、近代医学の恩恵を支那の人々に紹介する特権は、大部分、医療伝道の代表者たちの手に受持たれていた^①」。かつて済南の山東基督教大学学長を務めたハロルド・バルムが、『支那と近代医学—支那医療伝道史』（一九四一年）で語ったように、中国への近代医学の導入、公衆衛生制度の確立において、宣教師の医療伝道活動が大きな役割を果たしたものと公認されている。一方、一九世紀後半から、急速に近代化の改革に成功し、そして西洋各国の足跡に続き、東アジア進出に乗り出した日本が、後進国と呼ばれる周辺地域を「支配」してゆく過程で、日本の近代的医学がどのようにに伝播し、受容されたかはまだ十分に解明されていない。近年、各研究領域において、近代日中間の医学交流をめぐる研究がなされており、

個々の歴史事実が徐々に解明されてはいるが、しかし、これらの研究は中国側の日本医学の導入に偏る嫌いがあり、日本から中国への医学の輸出という視点からの研究は極めて少ない。これは中国における近代医学の受容と日本とのかわりの問題を考える際、とても重要な側面である。

筆者は以前、清国保全論と中国の日本学習熱の影響で、東亜同文会とはほぼ同時期に設立された対中国医療団体の同仁会（一九〇二—一九四六）について考察を行い、日中関係における当会の役割を、以下の三点にまとめた。すなわち中国侵略への協力、欧米文化事業への対抗、そして日本の近代医療・医学の普及である^③。しかし、同仁会の活動は日本の対中国医療活動の嚆矢ではない。その前に、明治の先覚者と呼ばれ、近代日本への西洋の学術・文明の輸入に尽力した一人の人物がいた。「日本最初の記者」でありながら、希有の

丁
蕾

商才により、日中を股に掛けて商業・医療・文化活動を行っていた岸田吟香（一八三三—一九〇五）である。彼は初めて洋式目薬・精錡水を日本で発売するなど、近代日本の医薬界への貢献はよく知られているが、その中国における売薬・医療活動に注目する研究は極めて少ない。本論は、岸田吟香が中国で行った多様な活動の中、とりわけ医学関係のものに着目し、新しい史料の分析により、その対中国医療活動の草分け的な存在としての歴史的な意味について検証したいと思う。具体的にはまずその活動の開始された背景を西洋の宣教師による中国への西洋医学輸出と一九世紀半ばにおける日中の医療事情から探った上、当時の新聞記事と広告などを手掛りに、その活動の特徴を分析し、また、日清戦争後盛んになった日本医療の中国進出との関連性も併せて考えてみたい。

一 宣教師と西洋医学導入

日本人の対中医療活動が行われる前に、一八三〇年代から西洋の宣教師が伝道のために中国の南方地域を訪れた。岸田吟香を論ずるに先立ち、この点を確認しておきたい。医療伝道とは、元来キリスト教において、医療を伝道の補助手段として行う活動である。一八三五年十一月にアメリカ公理会の伝道医師であるピーター・パーカーが、広州の十三行という外国人居留地で眼科病院を開設した。當時は広州眼科医局と呼ばれた。その前に東印度会社の通訳として雇

われたイギリスのロバート・モリソン、およびその他何人かの宣教師も小さな診療所を開設したが、医療活動を主要な伝道手段として使ったのはパーカーが嚆矢であった。『東西洋考毎月統計伝』はパーカーの慈善病院の状況をこのように報道している。^④

（前略）雖昼夜劳苦、然不取人之錢、而白白療症。（中略）莫說
廣東之各府州縣之人、就是福建、浙江、江西、江蘇、安徽、
山西各省居民求醫焉。儒農官員、各品人等、病來痊去矣。

（訳文）（前略）（パーカーは）日夜苦勞しても人のお金を取らず、
ただで治療する。（中略）広東省の各府、州、縣の人のほ
かに、福建、浙江、江西、江蘇、安徽、山西の各省の住民も診
療を求めに来る。儒者、農民、官僚など、各階層の人はみな治
癒して去っていく。

その病院の規模はアメリカ公理会海外伝道会本部への報告による
と、二〇〇人の外来患者と四〇人の入院患者を収容できたそう^⑤だ。
『中国叢報』に掲載された医療報告書の記録によると、治療患者数
（開院からの累計）は一八三六年で約二〇〇〇人、一八三七年は四五
七五人、一八三八年は六三〇〇人、一八三九年は七〇〇〇人に達
した。^⑥

広州市の人口は一八八二年—一八九一年の間に一八〇万人（郊外

と水上の住民を含む」と推計されるので、パーカーの病院の患者数の人口に占める割合は低い⁽⁷⁾が、当時の広東地域における盛んな排外風潮の中で、パーカーの病院が歓迎されたことは宣教師にとっても喜ばしい反響であった。したがって、宣教師の間に、もともと伝道の補助的な手段として行った医療活動を、主要な手段として利用しようという構想が生まれた。

一八三八年二月、この構想を実現した中国医療伝道会が広州で設立され、世界で初めての医療伝道の組織になった⁽⁸⁾。一八四〇年—一八四二年の末、会長と副会長を務めるカレッジとパーカーが欧米で当会への支持と援助を呼びかけ、中国および東アジアにおける医療伝道を支持する後援会が欧米で続々と設立された。こうして大量の活動資金が当会に注入された。

この団体の誕生は宣教師の西洋医学導入の活動において、大きな意味を持っている。というのは、もともと伝道の補助手段として行われた医療活動が、この団体の設立により、中国において伝道の主要手段として広められるようになったからである。それに伴って、中国の伝統医学と全く異なる西洋医学の技術と学問も中国に導入されてきた。言い換えれば、宣教師の医療伝道組織は、西洋医学の中国への導入に大きな役割を果たし始めたのである。

一八四二年、アヘン戦争が終結し、英、米、仏三国は中国とそれぞれ不平等条約を結んだ。宣教師の活動は南方地域に制限すること

が解除され、彼らは次第に五港開港都市に活動の拠点を移した。上海は地域上の利便性と政治・経済上の重要性により、医療伝道の新しい中心地になった。

さらに、イギリスの倫教会が一八四三年に仁濟病院（仁濟医館）を設立、アメリカの聖公会が一八六六年に同仁病院（同仁医局）を設立した。仁濟病院は特に設立者のロックハートの精妙な医術により名を馳せた。彼はもう一人の倫教会所属の宣教師であるメドハーストと一緒に、それぞれ医療と文書の伝道に励み、上海におけるプロテスタントの一大活動拠点を作ったのである。メドハーストの倫教会本部への報告によると、彼らは一八四六年に山東路と福建路の間に住宅を五棟、病院を一棟、印刷所を一棟建てた。病院と住居は一直線に繋がり、南向きで、しかもベランダつきである。病院は一階建てで、それ以外は二階建ての建物だという⁽⁹⁾。印刷所は即ち墨海書館のことであり、当時は漢訳洋書のセンターになっていた。

右記の両病院の運営状況は好調であり、患者数の増加は（表1）で知ることができる。そして無料診療の方針は南方時代と変わらなかった。

しかし、医療活動は当初キリスト教を伝播する目的で行われたが、病院で働く宣教師にとって次第に伝道を抜いて一番重要な仕事になった。たとえば、宗教活動の時間はほとんど診療業務にとられてしまったというパーカーの悩みは、宣教師の先行研究で紹介されて

表1 仁濟病院・同仁病院患者数一覧表

	仁濟病院	同仁病院	中国人の人口
1861年	38,069		
1869年	40,411	6,200	
1870年			378,008
1875年	56,624		
1876年			381,483(フランス租界が欠)
1877年		16,000	
1880年			278,312
1885年		22,209	
1896年	75,920		

(患者数は『教会新報』1870年3月5日、「上海仁濟醫院史略」『基督教与中国現代化國際學術研討會論文集』(別刷本)、『上海宗教史』の記載を参照して作成。中国人の人口は『上海道台研究—轉變社会中之連繫人物、1843—1890』の付録4を参考に計算。)

てくる。このような背景の下で、一八五〇年代から、パーカーの後任を務めたカー、ロックハートの後任を務めたホブソンは、計画的に医書の漢訳を始めた。ホブソンが翻訳した「医書五種」は、近代西洋医学の啓蒙書として、西洋医学の理論が中国に伝入した嚆矢と認められる。何回も版を重ねており、早くも日本へ翻刻という形で紹介された。カーは四〇年の間に三四種の医書を翻訳した。臨床医療技術の紹介が重点になっており、医書の大部分は教材として博濟

いる。各種の伝染病および漢方医が治療不能な疾病を患う病人の懇請、キリスト教伝道の挫折など、原因はさまざまだが、つまり宗教伝播の目的は次第に西洋医学の伝播に変わった。それを実現させるために、当然病院の診療活動だけではなく、医学知識の普及と医学教育も重要になっ

病院(広州眼科医局の後身)より出版された。〈既知の三三種の医書を(表2)に羅列する〉

医学教育は弟子訓練の形を採って各病院で試行された。しかし、生徒は入教者による知り合いの紹介が多く、公の募集結果は必ずしもいいとは言えない。例えば、宣教師のフライヤが編集した科学啓蒙の雑誌である『格致叢編』の中で、仁濟病院の医学教育の挫折が披露されている。⁽¹²⁾

各埠開設醫院甚多皆願收受生徒教以西医数月前聞上海仁濟醫館欲收生徒數名從學西医幫同診治來者須聰穎子弟已通華文數年之後業即可成久訪其人竟無就者(中略)皆因不明医学之要而不信西医之法也(後略)

(訳文)各港町は病院を設立するのが多く、皆生徒を受け入れて西洋医学を教えようとする。数ヶ月前、上海仁濟醫館は生徒を數名募集し、西洋医学を学ばせ共に患者の治療を手伝わせようとしたのを聞いた。聡明で中文に通じる若者が必要であり、数年後は卒業できる。久しく探しても応募者はとうとう現われなかった。(中略)皆医学の要を知らないため西洋医学の法則も信じないのである。(後略)

民衆の医学知識の習得程度から考えれば、編集者の分析に一理は

表2 カー翻訳医書一覧表

	書名	刊行年
1	『論発熱和疝』	1859年
2	『化学初階』(四卷)共訳者:何了然	1871年
3	『西薬略釈』(四卷)共訳者:孔高慶	1871年、増訂本1886年出版
4	『裏扎新篇』共訳者:林湘東	1872年
5	『皮膚新篇』共訳者:林湘東	1874年
6	『内科闡微』共訳者:林湘東	1874年
7	『花柳指迷』共訳者:林応祥	1875年
8	『眼科撮要』	1880年
9	『割症全書』(七卷)	1881年
10	『炎症』	1881年
11	『熱症』	1881年
12	『衛生要旨』校正者:海琴	1883年
13	『内科全書』(十六卷)共訳者:孔高慶	1883年
14	『体用十章』(四卷)	1884年
15	『婦科精蘊図説』五冊 共訳者:孔高慶	1889年
16	『種痘捷法』	不明
17	『論発冷小腸疝両症』	不明
18	『西医新法』	不明
19	『救溺水法』	不明
20	『症候学』	不明
21	『繙帯術概要』	不明
22	『奇症略述』	不明
23	『体質窮源』(訳者は尹端模であるという説がある)	不明
24	『英漢病名表』	不明
25	『全体通考』	不明
26	『西薬大成』	不明
27	『万国薬方』	不明
28	『儿科撮要』(訳者は尹端模であるという説がある)	不明
29	『儿科論略』	不明
30	『胎産挙要』(訳者は尹端模であるという説がある)	不明
31	『産科図説』	不明
32	『眼科證治』	不明
33	『皮膚證治』	不明

(『中国医学通史近代巻』『中外医学交流史』『中国プロテスタント伝道史研究』の記載を参考に作成)

幕府の強力な支持を得ることはなかった。しかし、一九世紀初頭から宣教師が上海を中心とした各開港都市で慈善医療を実施したところ、一八五三年のペリー来航とコレ

あるが、若者が西洋の学問を学ぶ意欲がないのは、科挙試験制度とも関連する。一九世紀の後半に、西洋の学問に興味を持つ一部の知識人と官僚はいたが、科挙制度はまだ廃止されなかつたので、西洋の実学の学問を学んでも、立身出世の道がない。したがって西洋医学を学ぼうとする若者もきわめて稀であった。

一八三〇年代から中国で始まった宣教師の伝道医療活動は、西洋各国の中国侵入を伴い、不平等条約の締結とともに中国の南方地域から開港都市へ、そして中国全国へと展開されていた。中国人の信仰を改変する目的は次第に西洋医学の導入に変わり、西洋医学を含む各種の科学知識は中国に伝入しつつあった。パーカーの病院のよ

うに、近代医学の医療は効果が素早く、民衆の病苦が救済できるので、歓迎される一面はあるが、医学教育の展開と学問体系の移植には時期尚早であった。

二 岸田吟香の対抗意識

ところで、宣教師の医療活動は日本人の対中医療活動とどのようなつながりがあるか。一見直接の関係がないようだが、実際、後者は前者に触発されて行われたところが大きかった。一七世紀の中頃から一九世紀の前半までの鎖国時代に、長崎にいたオランダ商館医を通じて西洋医学(蘭学)は非公式に日本に伝えられたが、必ずし

ラの大流行などにより幕府もようやく西洋医学の必要性を痛感するようになり、一八五八年七月に天保の改革で発布した蘭学禁止令を解除した。その後、日本は西洋医学を積極的に吸収し始めた。

この中で、来日のアメリカ宣教師のへボンから西洋目薬の精錡水の処方函授された岸田吟香は、それを目玉薬品として日本で販売し、西洋薬導入の先覚者とも呼ばれている。⁽¹³⁾ 日本だけでなく、彼は中国まで販路を広めた。そこにはどのような背景があったのだろうか。

一八五九年以降、幕府は対外貿易上の苦境から脱出するために、遂に江戸時代から続いた日本人の中国への渡航禁止を廃止した。そして清朝と直接に貿易関係を結ぶために、四回にわたって貿易の繁昌と西洋文明の発達で名を知られた上海に使節団を派遣した。その第一次使節団は一八六二年六月二日、幕府の「千歳丸」で上海に到着した。船員の武士たちは、太平天国の戦乱下における中国の実情と西洋文明の浸透に関する情報を精力的に収集し始めた。キリスト教の伝播の状況、宣教師の慈善医療活動も彼らの関心の的である。船員の一人である高杉晋作は「上海掩留日録」の中に、このように記す。⁽¹⁴⁾

五月二十三日、朝五代（五代友厚）と共に英人ミユルヘットを訪う、ミユルヘットは耶蘇教師、耶蘇教を上海士民に施す、

城内の教堂はミユルヘットの関する所なり、ミユルヘットの常居する所に教堂と病院とあり、施医院といい、総て西人教師の外邦に施教する所にて必ず医師を携う、士民に病且窮あればすなわちその病者をこの教に入らしむ、これ教師の外邦に教えを致すの術なり、吾が国の士君子は予防せざるべからざるなり

ミユルヘットは墨海書館で地理学の翻訳を担当している宣教師である。上述の「施医院」は墨海書館に隣接する仁済医館のことを指すに違いない。高杉は宣教師が医療をもって伝道することに警戒していることが分かる。

中国の民衆が宣教師の医術に魅了され、キリスト教に接近していくことに対する憂慮は納富介次郎の「上海雜記」にも窺える。⁽¹⁵⁾

又聞ク、洋人上海ニ於テ病院ヲ造営シ、数多ノ病人ヲ集メ療養ヲ施シアタヘ、薬剂等ニ於ケルモ上帝ノ命授スルトコロトシ、ソノ病ノ治スルモ亦上帝ノ救助シ玉フト云ヒ、必ズシモ医師ノ功トセズ。コレヲ以テ天主ノ有難キヲサトシ、ソノ教ヲ導ビクトシ、洋人等ハ素ヨリ医術ニ精シケレバ、清国ノ庸医等ガ及バザル妙療ヲナス故、愚民ハソノ命ノ助カリ得シヲ悦コブ餘リ、實ニ上帝ノ救助ナラント思ヒ、自ラコレヲ尊敬スル様ニナリシモ

高杉晋作を代表とする武士たちが持ったであろう、宣教師の医療活動が中国で影響力を発揮することに対する警戒心を、以上の二つの文献から読み取れる。武士たちの足跡に次いで上海に来た岸田吟香は宣教師の医療活動をどのように見たのか。

吟香は一八六六年九月にヘボン夫妻と一緒に上海を訪れた。前後八回の上海往訪の中でこれは初回である。ヘボン博士はアメリカの北米長老派の宣教師で、若い頃から東アジアに福音の伝播を志し、まず一八四三年にアモイで診療所を開設した。家族の病気が原因で二年後アメリカに帰国したが、一八五九年に日本を訪れ、横浜で医療伝道と文書伝道に着手した。吟香は彼の診療所で眼病が治癒したことから、博士の医術と人格に惹かれ、診療所で診療と和英辞書の編纂を手伝った。

吟香の博士との上海往訪の目的は、先進的な銅版印刷の設備と技術を持つアメリカ長老派所属の美華書館で、辞書『和英語林集成』の印刷に取り掛かることである。一八六七年五月までの滞在期間、中国の文人と交友する様子や、上海の町風景と中国人の生活状況などについて『吳淞日記』に記した。この中に宣教師の医療活動と関係のある記述が何箇所かに認められる。

まず、同仁病院の中国人牧師である吳虹玉の名前がしばしば登場している。吳は院内で日常的な医療業務を担当していた。日記の中に、慶応二年（一八六六）十二月十六日―十七日、吳氏の結婚式の

様子を二日続けて記している。¹⁶⁾

おてんきでよろしう。今日ハ吳虹玉が結親にて、あさからにきやかなり。客もよほどおほぜいはやくから来てさわぐ。それよりハ先、朝から十四五人の樂人が来て、音楽を奏するので、おもしろいやうで、おかしいやうで、やかましいやうで、こまるやうでござります。（後略）

宣教師病院の牧師と親しく付き合っている以上、病院の内部の状況も自然に彼の目に入っていただろう。また日記の記述によると、彼は黄近霞という文人からホブソンの訳書『博物新編』『婦嬰新説』『内科新説』なども手に入れたらしい。¹⁷⁾

慶応三年（一八六七）三月十六日

（前略）けふもひるから、ぶらりと出て黄近霞の處へいてはなすに、笛をふいてきかせたり、琴をひいてきかせたりする。博物新編と婦嬰新説内科新説と地球説略とをくれる。（後略）

このように、日記には直接に宣教師の病院を観察し、感想を述べた記録はないが、前述の記載で吟香は美華書館、墨海書館、仁濟病院、同仁病院という一連の施設が作り出した伝道の環境で生活し、

その影響を受けていたことは明らかである。

翌年の一八六八年、吟香は明治新政府に日中貿易に関する次のような意見書を提出している。⁽¹⁸⁾

(前略) 殊に日本は近隣に支那國と申便利の場所御座候。此支那と申す國は歐人の金箱御座候。此金儲けに極宜敷支那を差置候而歐洲或は米利堅に迄商賣に參り候は、甚だ以生理不明なる義に御座候。殊更御國の産物は支那人の尤も好む處に御座候。第一に人參、漆器、銅、錫、鉛、磁器、海參、昆布、鮑魚等は支那人の好物にて然も多く産するを以て之を蒸氣船に積込み、上海に送つて賣捌けば、多分の利潤有之、此對支貿易を行ふ為には、會社を設立し、堅く契約を相結び壹人前幾何宛とか出金して之に當るが最も宜敷候云々

中国人の好む日本商品を中国市場で販売することにより、中国での経済的權益を拡大する欧米各国に対抗すべきであるという内容である。彼は西洋の勢力の中国進出に対して強い危機感を抱いていた。「貿易立国」の抱負、上海滯在中の伝道施設、宣教師医師とのかわり、この二つを合わせて考えると、宣教師の慈善医療活動が徐々に中国で勢力を拡大していくのに対して、吟香が、對抗意識を持たないはずはない。そしてこれは彼をして中国で医療活動を展開させた

一つの動機になっていたと思う。

三 一九世紀日中の眼病事情

岸田吟香は日中兩國の社会医療状況に対しても強い関心を持っていた。

『吳淞日記』に中国の医者と医療状況に対する厳しい批判が書かれている。⁽¹⁹⁾

支那のものハ、おやの大病でも、子がしにさうでも、醫者にかゝらずに廟へまゐつて、おミくじを取つてみたり、神にいのつたり、道士をたのんで、おかちをしてもらふたり、寺へまゐつて佛をたのんだりするなり。醫者にかゝるのハ、いつでもいけなくなつてからだといふ。醫者もろくな醫者ハないやうす也。おいらの知つた者のうちにも四五人醫者があるが、この中で家など一番よくしてゐるのハ鐘星様なり。その外ハミなびんぼうで、なんだか上手らしくハなし。町中にでも、ざいごにでも、そこいらうちに醫者の引札ハ、べたはりつけてあるなり。三天全癒白濁丸だの、馮存仁先生男婦方脈だのとかいてある。のうがきハミなたいさうだが、その醫者といふ男に逢つて見れば、いつも皆むさくろしいぢいなり。日本の醫者様のやうに、醫者衣也美其衣以眩人目也といふやうなわけでハなし。俗人と

おなじなりをしてゐる也。醫者異也異其言語衣服以驚人耳目也といふやうなわけとも見えず。医者稲荷といふ處はおなじかもしらず。さて、ひるからハ病家へミまひにいくなどハおなじ。

病人がくれバ脈を見てから薬の方書をしてやる也。病人、そのかきつけを、きぐすりやへもていて、調合してもらつてのむ也。それだから支那のハ醫者ハ醫でも、薬箱ハもたぬ。薬御用なら、あゝやかましい、もうよせ。

上記の文中から中国の出鱈目な民間医への揶揄がひしひしと伝わってくる。ちゃんとした立派な屋敷を持たず、服装もみすばらしい。その上に、言葉が平凡で、患者を引きつけるものがない。また、中国社会における良質の医療の欠乏、薬品の購買の不便さに対する感嘆も窺える。

清の末期の江南地域では、中国の他の地方と同様、民間の医療条件は決していいとはいえない。数軒の教会病院を除けば、民間の医者概して「儒医」と「草医」「江湖医」に分かれていた。²⁰ 吟香が目撃したのは医療レベルの低い「草医」「江湖医」の類に属する医者に違いない。当時、太平天国の革命と小刀会の蜂起で、江南地域からたくさんさんの難民が上海に避難してきた。太平天国は革命の初期に、民間医をたくさん招聘して軍医にしたが、一八五三年に南京に都を定めた後、政権の中で医薬衛生の部門を作り、また何度も民間

医を招聘して市民に医療サービスを提供した。たとえば、国医の称号を与えられた李俊良は、六〇人の民間医を南京市の各街道に散らばらせ、市民の治療に臨ませた。²¹ 難民の医療に対する需要、および太平天国の招聘活動で、江南地域の民間医の流動は活発になったと思われる。その中で、当然藪医者のような「草医」「江湖医」も多数混在していた。

中国の遅れた社会医療状況を目にして、吟香は何か行動を起こそうとしただろう。当時は西洋の勢力の進出に伴い、人の移動、交易が活発化するとともに、戦争までも発生し、不潔な環境における細菌の感染で、各種の伝染病が蔓延して民衆を苦しめた。周知のコレラ、マラリア、ペストなどの疫病のほかに、いま日常的にそれほど重い病気ではないが、実際、眼病も日中両国で猛威を振るい、人々を大きく悩ませた。

まず日本の状況を見てみよう。吟香自身は一八六四年四月に眼病を患い、一カ月あまり手を尽くしても治らないものの、横浜にあるヘボンの医館で液体目薬の点眼の治療を受けた後、一週間で全治した。その経緯は「目薬精錡水功驗書」の公布で世に知られている。²² 生薬を主体とし、ハマグリ殻の中に入れる糊状の民間目薬より使いやすく、効果も顕著である。

当時、横浜の近郊では眼病の患者も多く、ヘボンの医館は隆盛を極めた。『横浜沿革誌』にこのように記載されている。²³

明治二年、横浜居留地三十九番館に於て、米国ドクトル、ヘボン氏、毎月土、日兩曜日を以て内外科、眼科患者を治療す。

診察の日、門前市をなす。殊に眼病患者多く、中には頗る難症あるも全治せざるはなし。故に人皆これを眼醫士と云ふ。：

(中略)：十数年間、氏の治療を受けたるもの幾万人なるを知らず。実に得べからざる慈善家と云ふべし。

一八五七年—一八六二年に來日した蘭医のポンベは、『日本滞在見聞記』に長崎に眼病が多く、住民の八%が眼病を患っており、日本に來れば眼科の勉強になると披露している。一八七八年に、新潟に巡幸で訪れた天皇の命令を受け、侍医の伊東方成が眼病に関する調査を行った。一八七三年から一八七七年まで、新潟医学所の患者一万九〇〇〇人のうち、三〇〇〇人以上が眼病患者である。患者の知識レベルが低いため、不潔で伝染性の眼病が多いのが原因であると報告された。明治期に多数の病院の眼病統計に結膜、角膜疾患が多いことが示されている。⁽²⁴⁾

また統計にはあまり見られないが、現実には淋毒性濃漏眼、一種の性病性眼炎も広い範囲で流行した。患者は激烈な眼痛と頭痛を感じ、よく不眠を訴える。しばらくして角膜が化膿してしまふという凄まじい症状であった。⁽²⁵⁾

淋毒性濃漏眼が我眼科界を蹂躪することは眼病トラホームと兄たり難く弟たり難しと云ふ有様にて、時に或はトラホームに一步を抜いて居ることがないでもないが衛生の注意さへ怠らなければ此の猛悪なる眼疾を治する事が出来ず。然し之を等閑に附するときは遂に兩眼明を失して殆ど廢物と同様の慘境に陥るのであります。⁽²⁶⁾

中国の状況はどうであろうか。同じく西洋勢力の進出に遭遇した中国でも、眼病が大いに蔓延したと思われる。東印度会社の医師のレビンストンが一八三〇年代に行った調査によると、中国の貧困層の主要疾患は「清潔」と「不潔」とに分かれる。前者は盲目、聾啞、跛に集中し、眼病はもつとも多かつたらしい。不潔は即ちハンセン病である。⁽²⁷⁾ パーカーの広東病院は眼科医局と名づけられ、開院早々にして眼病患者を含む大勢の患者で埋め尽くされた。⁽²⁸⁾ 医療伝道會本部への医療報告書からも、眼の疾患の比率が高かつたことが分かる。たとえば、一八四八年—一八四九年の報告書で、眼の疾患は一八四八年では二一二二例であり、一八四九年では二一四三例がある。一八四八年と一八四九年の全体の疾患数はそれぞれ四〇〇一例と四五〇四例があるので、眼症は全体の半分を占めていた。⁽²⁹⁾

一八四三年に上海で開設された仁濟病院は、設立者のロックハートが眼科と外科の手術に精通していることが評判であった。墨海書

館で翻訳の仕事を手伝い、且つ新式の知識人の代表と言われている王韜は、『瀛壖雜誌』の中でこのように紹介している。⁽³⁰⁾

施医院、即今之仁濟医館也。與墨海毘連。專治華人疾病。主其事者為西醫洛頡、称刀圭精手。(中略)洛君尤精於眼科。藏有空青数枚、光滑如鵝卵、揺之中有水聲。他如癰疽惡瘍、跌折損傷、治之多立愈。

(訳文) 施医院、即ち今の仁濟医館である。墨海書館に隣接しており、専ら中国人の病気を治療する。その主事者は西洋医者の洛頡であり、刀圭名手と称される。(中略) 洛氏は尤も眼科に精通する。「空青」(藍銅鉱の一種、眼薬に用いる)を数枚收藏し、家鴨の卵のように滑らかで揺らしたら中に水の音がする。他に癰・疽・瘍の病氣と骨折の損傷も即ち治癒できる。

一八五四年五月、太平天国が南京で発布した「招延良医誠諭」で、各科目の専門医を招聘しているが、眼科に精通した者を一番優遇すると明言した。「果能医治見効、即賞給丞相」⁽³¹⁾。即ちもし治療の効果が現れたら、直ちに丞相の官位を賜るとある。

時代は少々後になるが、一八七二年三月に、広東籍商人の盲目の娘が、全財産を寄付し、上海の寧波路に眼病専科の体仁病院を設立した。以後、この病院は同仁病院と合併した。⁽³²⁾ この事実も当時眼病

がかなり流行したことを裏付ける。

一九〇三年、芝罘港における日本人衛生会の前任医師である出田龍馬は、中国人街にある我凌萬堂藥館の館主と合作し、当藥館で開業した。患者の病気を大別すると、眼病、特にトラホームが最も多く、梅毒下肢潰瘍がこれに次ぐという。⁽³³⁾

このように、明治期に眼病が日中兩國で流行したことは自明である。吟香の精錡水の販売に至るまでの経緯をより分かりやすく説明するため、ここで年代順に羅列する。

一八六四年 へボンが調査した目薬で眼病が治癒

一八六六年九月—一八六七年五月 『和英語林集成』印刷のため、へボンと一緒に上海に滞在、『吳淞日記』

を記述

一八六七年五月 初回の上海往訪を終えて帰国

一八六七年八月 日本でへボンに教わった処方で精錡水を製造

一八六八年二月 汽船購入のため、二度目の上海往訪

美華書館が所在する小東門外の瑞興号と揚經橋の万祥号に精錡水の委託販売を依頼

この略年表を見れば分かるように、吟香は眼病の治療を体験し、上海の貧弱な社会医療状況を見てから精錡水を中国に売り広めた。

精錡水の引札に、適応症はのぼせ目（目の充血）、かすみ目（翳んだ目）、突き目（眼の外傷）、血目、はやり目（流行性結膜炎）、ただれ目（眼瞼縁炎）などが挙げられている。その主成分は硫酸亜鉛である。緩和と収斂作用があり、それに基づく組織の治癒促進の効果もある。現在の眼科の臨床でもその処方が高く使われていることから、当時の民衆にとっては治癒効果が驚くほど抜群であったに違いない。³⁴したがって、日本人だけではなく、眼病に苦しんだ中国人にも大きく効果を発揮すると吟香は予想していたと思われる。

このように、当時中国の遅れた社会的医療条件の中で、眼病の流行は日本の医薬が中国市場に割り込むきっかけとなった。これは彼が医療活動を開始した一つの要因になる。

四 西洋医薬と東洋「看板」

岸田吟香は一八八〇年一月、薬局「楽善堂」の上海支店を開設するため、三回目に上海を訪れ、上海で正式に医療活動を開始した。

「楽善堂書業房」の看板が河南路の工部局の真向かいに掲げられる。精錡水を目玉商品とした日本の薬品、雑貨、書籍を販売し、しかも発行部数が一番多かった『申報』で大量の広告を出した。広告の中で各地の代理商を募集し、中国全土へと販売網を広げていく。

一八八〇年—一八九〇年の間に、上海（本店）のほか、漢口、四川、福州、天津、北京にも支店を設けた。³⁵周知のように、吟香は

主に新聞広告という宣伝方法を用いて消費者の獲得に努めた。陳祖恩氏の統計によると、一八八〇年—一八九三年の間に、『申報』に掲載された楽善堂薬品の広告は一〇〇種もある。³⁶

これらの薬品は日本の新聞に掲載された楽善堂広告と衛生宣伝書の『衛生新編』（一八九三年）に書かれた薬品の紹介を見ると、西洋から導入したもの、言い換えれば、西洋薬と思われるものが一部を占めていた。『衛生新編』は吟香が一八九一年に初めて日本で出版した衛生宣伝書の『衛生手函』の続編である。薬品四二種の中に、一〇種が欧米の医者、病院あるいは日本の医者、病院により開発されたと書いている。しかし、『申報』の楽善堂広告と上海で出版された増補『楽善堂書目』（一八八七年）の四四種の薬品リストを見ると、薬品の開発元というような説明が一切なく、全てがあたかも漢方薬のように宣伝されている。

『衛生新編』掲載の西洋薬の開発元³⁷

- 1 精錡水…アメリカの大医平文先生より直伝の名方、目薬
- 2 鉄飴煎…東京大学医学部お雇いのドイツ医学博士ベルツ先生の処方、薬局長草野元養先生が精錬したもの、滋養強壯
- 3 崑壽蘭護酒…南米洲の白露國より産出、胃癌、胃潰瘍の特効薬
- 4 マルツエキス…麦児子液素、滋養強壯、欧米各国病院で愛

用される

5 補養丸…イギリスの合信先生、上海の惠済（仁済？）医院で支那人の性質虚弱に発明したもの

6 小兒葉王キンドル散…ドイツの大医Drフヘランド先生の処方

7 經驗解熱丸…日本病院において数千回の試験を経て発明された薬品

8 健歩散…脚気の妙薬、原田侍医、東京大学医学部の脚気病院長だったとき発明した薬

9 複方沃度丁幾…疝癖レウマチス、皮膚病塗薬、日本薬局方の定量に基づき薬料を精選し調製したもの

10 歯痛わすれ薬…小幡先生の伝方、米国で歯科の医術を修業したとき用いた薬

『薬善堂書目』薬品リストの冒頭…

日本處扶桑之東極古稱蓬萊現在瀛洲中多仙山靈水間産奇樹菓草其神掌東方陽和之氣是以醫亦多神手本堂向在東京開設多年庚申三月分設上海所選製各種丸散膏丹俱係仙傳秘方揀選道地上等藥料濟世為懷加意修合務期藥到病除同登壽域

（訳文）日本は扶桑の東の端に位置し、古くは蓬萊、現在は瀛洲と称する。国に仙山と靈水が多く、珍しい樹木と薬草を産出

する。その神は東方の陽と和の気を掌り、以て医者も名手が多い。当店は東京で開設し多年を経過したが、庚申の三月に上海で支店を設けた。選択し製造した各種の丸薬、散剂、膏薬、丹薬は皆仙人が伝授した秘方である。本物の上等の薬種を選択し、濟世を志とする。心を込めて修練したので、務めて薬が効き病気が治り、共に長寿の域に登ることを願う。

当時は精錡水のほかに、「薬善堂三薬」と命名された三種の薬も日本でよく宣伝され、錦絵・引札にも載せられた。その三薬は「補養丸」「鎮溜飲」「穩通丸」である。『衛生新編』の中に、補養丸は、ホブソンが上海の惠済病院にいた時、中国人は体質の虚弱の人が多いのを見て開発したものと説明しており、また気血を補い、精神を養う効能があると書いている。³⁸⁾「三薬」の引札にも、「補養丸」の傍に「官許英醫合信氏遺方」という一行がある。⁴⁰⁾一方、増補『薬善堂書目』に補養丸と類似する漢方薬名の「人参大補丸」がある。⁴¹⁾当書目は中国人を読者層にして上海で出版されたのもかかわらず、開発元の説明は全部避けており、「人参大補丸」の条目にもそれに關する説明は見当たらない。

西洋医学が徐々に上海で普及しつつあったこの時期、なぜ「西薬」を堂々と名乗らず、「中薬」と思わせるような文句で説明文を書いたのか。西洋医学の受け入れ状況という角度からこの疑問を解

いてみたい。

当時の『申報』の医学・医療に関する論説と投稿を手がかりに、西洋医学の受け入れ情勢を垣間見ることができ、全部列挙することは不可能であるが、たとえば西洋医学（以下西医と表記）と中国医学（以下中医と表記）に対して、以下の論説があった。

（前略）外國之藥其名既異其性複殊而且研末煉水更無從而知其形故中國人明知其藥之良而不敢服誠恐服之有誤而無術以救正之（後略）

（訳文）（前略）外国の薬は名称が異なり、性質も特殊である。その上、粉末に研ぎ、水で練るのだから、その形を更に知る由がない。故に中国人はその薬のよさを知っているものの、飲むのを怖がる。誤って飲んだら救う術がないのを恐れるから。

（後略）

（前略）若謂西醫不善於治内症而藥不宜於治華人何以中國貧窮諸人之患内症者就醫藥於館中愈者亦多未聞其有九死一生也而中國富貴人家之患各症者延中國之醫服中國之藥不愈者亦多未聞其能起死回生也（中略）又何必疑西醫而信華醫輕西藥而重華藥

（後略）

（訳文）（前略）西医は内証に長じない、その薬も華人に適應し

ないと謂うなら、なぜ中国の貧困者で内証を患った者が病院で治療を受けたら、治った人も多いのか。九死一生の人を未だ聞いたことがない。それに対して、中国の裕福の家の人は各種の病気を患った後、中医を招来し、中国の薬を服しても治らない人も多い。起死回生ができるなど未だ聞いたことがない。（中略）西医を疑い、中医を信じ、また西薬を軽視し、中薬を重視する必要はどこにあるのか。（後略）

奇症倏愈 中西之醫理雖微有不同然治外症則西醫似較爽○昨悉有寶山縣人錢姓者年約四十餘腰下生一贅瘤大幾如斗蓋已多年矣（中略）屢謁中國名醫咸為束手因向仁濟醫館求治醫士謂此易與耳遂取利刃將四周之皮由漸割開所有血筋與膚肉相連者亦盡刮下然後曲折其刃從底挖出則儼然如一大球也（後略）

（訳文）奇病が急速に治癒 中国医学と西洋医学の理論は微かに異なった所はあるが、然るに外科の治療は西洋医学のほうが比較的素早い。昨日は寶山県出身で錢を名乗る者がいると知った。年は約四十余で、腰の下に瘤が生えている。升のように大きく、すでに多年を経過した。（中略）何度も中国の名医を尋ねたが、皆手の施しようがない。それ故、仁濟医館に治療を求めた。医師はこれが簡単に解決できると言った。遂に鋭利な刀を取り周りの皮を漸次に切り分け、血管と経絡が皮と肉につ

なぐるものを悉くこそぎ取った。その後、刃物を曲げ底から瘤を掘り出した。瘤はまるで大球のようである。(後略)

『申報』の一面に掲載された医学に関する論説、記事は的確に中医と西医とを対照的に捉えて論評した。長い医学の伝統を持つ中国に西医を導入する際、受け入れ側の反応としては尤もである。例として挙げられた上記の論説を読めば、世間に「西医は外科に長じ、内科に欠けている」という認識が存在することが伝わってくる。前節で述べたように、宣教医師は慈善医療の方針と外科などの医術で民衆の歓迎を受けた。上海において患者数も徐々に増えつつあった。しかし、歓迎されたのは外科などのような漢方医が苦手の医術に留まり、内科の診療と西洋薬はまだかなり抵抗され、十分には受け入れられてはいなかった。

そうした状況の中で、吟香は日本に導入され、開発された西薬・西薬を中国に広める際、中国人に受け入れやすい中医・中薬の名目を借りて宣伝の目的を達成しようとしたと思われる。

町の「江湖医」「草医」を風刺した吟香は、「榮善堂書業舖」という看板を掲げた二階建ての建物で開業し、二階を上海の文人と漢詩を詠む玉蘭吟社の活動の場所にした。⁴⁵ また、上海の詩人を毎月二回ぐらい招待して交遊した。⁴⁶ 一八八九年春、日本に帰国する前に、かつて墨海書館で翻訳の仕事を手伝った王蹈が、漢詩を詠む玉蘭吟社

の仲間と送別文を書いた。彼は中医の医者として評価されたことが明らかである。

(前略) 生平實隱於醫萃凡金匱之秘方靈樞之妙籍潛心探索窮其中久之而悟徹精微出神入化嘗設藥肆於海上求醫者戶限幾穿先生每為之按脉立方斟酌盡善一經診治無不著手成春⁴⁷

(訳文) (前略) (岸田吟香先生は) 普段医学に隱遁し、凡そ金匱の秘方、靈樞の名著は心を打ち込んで研究し、その中の秘訣を追求する。久しくしてその精微を悟り、絶妙の域に達する。薬店を上海で開設し、薬を求めようとした人々の押し合いで、門が壊されるほど人気があった。先生は病人の脈を診て処方箋を書きたびに、常に熟慮し善を尽くす。診療を受けた人で、治癒しない人はいない。(後略)

王蹈の評価から見ると、吟香は中医の開業と診察の方式、つまり「坐堂」と「脈診」の方式を取っていた。「坐堂」は儒医の一つの開業の方式で、医者は薬店で患者を診察し、薬材を調合する。もう一つの開業の方式は屋敷で患者を診察し、処方箋を渡すだけで、薬材は患者に薬店で購入してもらう。儒医は官僚が退官後に医を趣味とする人や、科擧に落第して医を行う人が自称する表現である。町の「江湖医」「草医」より医療レベルと社会的地位が高いのは言うまで

もない。

中医の開業と診察の方法を使いながら、吟香は西洋医学の知識を中国に導入した。ほぼ四ヶ月前に、玉蘭吟社の友人と交流する会合で、吟香は「折疊式明堂内外全図」を紹介し、その具体的な構造は『申報』で披露されている。

折疊明堂内外全圖乃日本岸吟香先生之所手製也吟老精岐黃術懸壺於滬上者有年矣所售各藥悉本樞經以故投無不效聲名鵲起近復手製一圖以紙為之如一本書開視則中有人形兩面一為正面一為反面反面之中糸五臟六腑十二經絡蓋本素問人之五臟系於背之說外為肋骨揭去一層即為臟腑又將臟腑分為内外兩層間有分作三層者層層揭開條分縷晰一無遺漏⁽⁴⁸⁾(後略)

(訳文) 折疊明堂内外全図は日本の岸吟香先生が手で製造したものである。吟老は漢方医術に精通しており、上海において医者として開業して数年が経った。販売された各種の薬は、すべて重要な経絡に基づいて開発されたため、効かないものはない。名声が急に高まった。最近また手で図を一枚製造した。紙で為している。一冊の本に似ており、開いて中を見ると、人形が二面を為している。一面は表であり、一面は裏面である。裏面では五臟六腑と十二經絡を結んでいる。人の五臟は背中に結ぶという素問の説に基づく。外は肋骨であり、一枚を開けたら、即

ち臟腑である。又臟腑は内外の二枚に分け、間に三枚に分けるものもある。一枚一枚開けて、細目が明瞭で、漏れるものがない。(後略)

この図は一体何のものかという点、標題の「明堂」は鍼灸の模型あるいはツボの標示の点を表しており、人体の経脈とツボの図ともいう。ざっと読めば、中医の人体経脈とツボの図を開示しているように思われる。おまけに、文中の「素問」は中医の經典『黄帝内经』の一種の伝本を指している。「内経」は中国現存の最古の医学理論の著作で、中医理論の源流と見なされている。したがって、これは中医系統の人体経脈内景図ととらえても不思議ではない。しかしその一方で、内臓を紙で切り抜き、貼り合わせた上で、一枚一枚開いて中のものを順次見せる形式は一七世紀のヨーロッパの解剖入門書の仕掛けである。この矛盾をどう解釈すればいいか。合理的な推測は中医の伝統理論を援用した西医の解剖図で、吟香は中国の伝統医学の権威を借りて西洋医学の受容を図ったと思われる。

また、新聞広告のほかに、吟香は毎年の正月に、カレンダー付きの引き札を同業者に配り、楽善堂の名声の向上に利用した。

鳴謝雅祝 日本岸吟香君博雅好古精於謚正文字復擅青囊術杏林春暖久嗅芳名昨承祝以本年中東西合璧月分牌雕鏤精工顔色鮮

麗懸之座右實足豁目賞心⁴⁹（後略）

（訳文）恵贈への感謝 日本の岸吟香君は博雅の君子で古典の文物を好む。文字の考証に精通し、または名医でもあり、その芳名は久しく響いている。昨日は本年の陰曆と陽曆を合わせたカレンダーを賜った。印刷は精緻で、色彩鮮麗である。座右に懸ければ実に目と心を楽しませてくれる。

岸田吟香先生創設楽善堂藥室於本埠河南路歷年新歲必印成中西合歷惠贈同人上方遍繪東國衆仙及扶桑勝景新奇佳妙早已記諸報端矣⁵⁰（後略）

（訳文）岸田吟香先生は楽善堂藥室をわが町の河南路に設立している。毎年の新年、必ず陰曆と陽曆を合わせたカレンダーを印刷し、同業者に恵贈する。上に至る所で東国の仙人と扶桑の景勝が描かれている。新奇で美しく、早くからも諸新聞に記載されていた。（後略）

上記の報道によると、引札は精巧に製作され、東洋の情趣を漂わせる日本の仙人と勝景が描かれているようだ。吟香本人の趣味を反映しているのももちろんであるが、一部の民衆の伝統を好む趣味を考えてデザインしたといっても過言ではないだろう。

宣教師が上海を中心とした各都市で伝道医療を展開する中で、吟

香は一部の中国人が中医の内科と「中藥」に固執した傾向から、中医の診療兼売藥の開業方式と脈診の診察方法により、地元の信賴を獲得しつつ、西洋の医薬を中国の医薬の名目を利用して導入する特徴が見られた。

五 アヘン中毒の救助と中国保全

一部の中国人の中医信賴に合わせた手法で西洋の医薬を導入する傍ら、吟香は中国人のアヘン吸飲を深く憂慮した。周知のように、イギリスのアヘン商人の密輸入で一七七三年からアヘンは加速度的に中国に流入し、一八三八年には四万二〇〇箱が中国に持ち込まれた。アヘンの中毒者は一八三五年の推計ですでに二〇〇万人以上とある⁵¹。支配階級から知識人・商人・兵士・僧侶・道士・娼妓などあらゆる階層の者を蝕んでいた。清政府は銀の流出と兵士の吸飲を危惧して一時禁止令を出したが、効果が現れず、林則徐を代表とする禁煙派の強固な禁絶措置でアヘン戦争を引き起こしたものの、結局、清政府は妥協派の弛禁論の意見を採用し、林則徐に免職の処分を与えた。その結果、一八五八年の第二次アヘン戦争の敗戦により締結された「天津条約」においてアヘン貿易が合法となり、外国商人が輸入税さえ払えば販売することができるようになった。清政府は国内のアヘンの栽培と販売に対しても制限を加えることがなくなった。そして上海ではアヘン吸飲の場所を提供する煙館が急速に増え、

一八七〇年代に入ると、一七〇〇軒余の煙館も誕生した。⁽⁵²⁾

一八六七年の『吳淞日記』に、吟香はこのように記した。⁽⁵³⁾

三月二十二日、(前略)支那で一番おかしきならはしハ、女のあしをしぼる事なり。それからをこのあたまの尾なり。それから阿片煙をのむ事なり。それからくつのあたまの、うへへむいている事也。それからつめのながい事なり。まだいろいろおかしき事あり。

清末の封建的・廃類的な風俗習慣は彼の風刺的になり、アヘンの吸飲は三番目のおかしいことと位置づけられた。だが、彼はただ傍観者として発言するだけではなく、アヘン中毒者の救助も医療活動の内容に繰り込んだ。

上海楽善堂が販売した薬の中で、聖恵戒煙丸と戒煙紅両散という二種類の戒煙薬がある。日本本店が開発した鉄飴煎は、次の引用に見るように戒煙に役立つ情報が福州の支店から報告された。戒煙紅両散という中薬らしい名前をつけて中国で販売したものと推測できる。

(前略)當支店も近比益々評判よろしく精錡水其の外とも日々買客店に満ち申候、當地ハ醫者に乏しき故か賣薬店ハ多く是あ

り候へども孰れも古風の丸散膏丹のみなり、本舗の鉄飴煎ハ鴉片煙毒にて衰弱したる者に尤も効ありとて能く賣れ申候。⁽⁵⁴⁾

一八九四年、朝鮮での權益と宗主権をめぐる発生した日清戦争が、清朝軍の敗北で幕を閉じた。惨敗に対する反省は中国の朝野においてなされた。吟香は甲府へ旅行した際、売業者の招待を受けた席上で、中国の敗北を国家制度の不完全、民心の隔離、アヘンの喫煙という三点の原因に集約した。

支那ハ邦土我に二十倍し人口亦我に十倍す此の廣大なる邦土と多くの人口を有しながら一たび我國と干戈相見るや一敗地に塗れて彼が如き醜状と萬國に曝らせしハ如何なる原因によるか個人間の心情と体力とに比すれば彼我格別の差と見ざれ大敗原因の大部分ハ國家制度の不完全に歸せざると得ずさて愛親覚羅氏ハ滿洲の一隅より起り現今の帝國と成せしものなれば民心の隔離種族間の軋轢蔑視ハ能く國家的統合と為さしむる能はず且つ百年前英人が侵畧主義の先驅として鴉片の輸入と支那に致し以て心神と敗頹せしめ併呑の手段に供せんとせしより鴉片喫煙の風清国の上下と通じて行はれ相率ひて滔々風となし遂に清民の體格心質に變移と來らしめたり。⁽⁵⁵⁾(後略)

イギリスのアヘン商人の密輸入により中国人は次第に吸飲に溺れ、心身両面の健康が蝕まれた。国民の体格が衰え、精神が退廃した状態が続く。その結果、国力の向上、軍事戦力の發揮に大きな影響を及ぼす。アヘンの蔓延が亡国の危機をもたらすと、吟香は分析している。

一八八一年四月、吟香はアジアの提携、振興を目的とした興亜会の議員に選任された。維新政府成立後まもなく中国における日本商品の開拓で欧米の貿易競争に対抗する建議書を提出し、且つ一八八七年三月から参謀本部派遣将校の荒尾精に多方面の援助をし、漢口楽善堂支店の看板の下で、中国の実情調査を遂行させたなど、こうした政治と関連する一連の行動を見ると、吟香は早くから西洋勢力の進入に備え、日中の提携を唱える日中連帯論の支持者の一人であった。

したがって、日清戦争後の中国へ渡航する日本人が増加する状況に備えて、中国人の中毒者と同じように心身衰弱の廃人にならないよう、吟香は早くからアヘン防止の宣伝に着手した。

その宣伝の主旨は、一八九六年三月の日本薬学会例会で行われた講演で確認できる。⁵⁶⁾

現今清國ニ於ケル鴉片喫烟ノ流行ハ其害毒尤モ烈シキ者ニシ其隣邦タル我國ニ於テハ尤モ顧慮戒心スル所ナカル可カラズ殊

ニ戦勝後ハ交際モ益々親密ト成リ往来モ頻繁ニ至ルベケレバ務メテ其流毒ノ情態ヲモ詳知シ置ザルベカラザルニナレバ兼テ彼の地ニ在リシ頃見聞シタル所ヲ演説シテ之ヲ諸君ニ報道スルハ世道ニ裨益ナキニ非ザルベシ（後略）

それから一八九八年八月、光緒帝が日本を見本とする資本主義改革の変法維新を採択した二ヵ月後、吟香は中国旅行中の伊藤博文へ、アヘン防止のため私費での「戒煙医院」設立につき、清朝の要人の諒解を取り付けてほしい旨の手紙を書いた。⁵⁷⁾

（前略）御存じ之通り私は久敷支那に於て而て売薬を業と致し居候へ共、或る人は医者之様に思ひ居候者も有之、相応に名声をも得居候事に御座候。樽原氏等も御存じ可有之、兼而之志願は現在支那全国に蔓延致居候鴉片煙毒を禁絶致度との希望に御座候。然るに張之洞も勸学篇、内篇之終末に去毒之一章を出し、悲哉洋烟之為害乃今日之洪水猛兽也云々、更に数十年を経ば必ず中国化して四裔之魑魅と為らんと而已嘆息して、其去毒之法は僅に興学者戒烟之薬也と言へり。今日盛行之鴉片煙毒を唯学校を興す位之事に而戒絶致候事は亦も六ヶ敷と奉存候。然るに私は幸に此変法維新之機に乗じ清国に於て而戒烟医院を興し度と存候事に御座候。療法を以て烟癮を戒断致し候は不難と奉存候。其

仕法等之詳細は寸楮之能く所尽に無之候へども、始め先私の私費を以而可然所に戒烟医院を創設致し、夫より逐漸推拡各地に開設致し候は、二三十年後には鴉片妖烟を支那国より掃清可致と奉存候。此事尤も自強致富第一緊要事件に而目下清国当務之急と奉存候。(後略)

三ヵ月後の十一月、中国の領土の保全、改革の支援を主旨とする「東亜同文会」の設立大会で、吟香は評議員に選出された。中国の変法維新の機運を利用してアヘンの害を中国全国で消滅する目的で、私費での戒烟病院設立をするため清朝の要人の協力を得ようとした。なぜ吟香は私費を投じてまで戒烟病院を中国で設立しようとしたか。これは中国のアヘン問題の深刻化と関係がある。アヘンの害毒が中国で広まる中、法律で禁止する措置は一九〇九年に上海で開かれた国際アヘン会議でようやく実施された。その前に出された清政府の禁煙の法令はアヘン戦争で廃止になり、以後ほとんど何の取り締まり政策も採られなかった。吟香が言った張之洞などの洋務運動の提唱者たちも、ただ新式の学校を設立して民衆を教育することによって害毒を防ごうとした。これでは害毒の源を絶つことはできず、消極的な防止策と言うしかない。清政府の無力な対応により、中国人の中毒者はさらに増えるばかりでなく、中国で増加する居留日本人にも害を及ぼす恐れがある。

そのため、吟香は積極的に戒煙の措置を採ろうとしたのだろう。アヘン中毒の治療にはこれといった特效薬がなく、本人の意志と忍耐力によるところが大きいため、専門病院を設けて適切な薬物の投与と医者との管理で耽溺を断絶するのが効率的な戒毒法である。

この願いを実現するため、一八九九年八月、義和団と八国連軍が北京で激戦している最中、吟香は再び伊藤博文へ、アヘンの救済事業を執行する旨の手紙を送った。⁽⁵⁸⁾

侯爵伊藤大人閣下

支那北事戡定後は必ず阿片煙戒断事業之宿志を遂行仕候見込に御坐候。乍序申上候也。

結局、アヘン病院設立の願いは実現できないまま、吟香は一九〇五年六月七日に病死した。しかし、中国で系列病院を設立する構想は、一九〇二年六月に医療団体の同仁会の結成によって実現された。この団体の設立は吟香一人の力で達成させたのではないが、彼が主唱したものであり、また、吟香が医学界の名士と東亜同文会の幹部を連合させる役割も果たしたらしい。⁽⁵⁹⁾ 吟香の提案と推進力がなければ、同仁会は設立できなかったかもしれない。彼が行った医療活動は、後に発生した日本の対中医療進出に対して、正に先導的な役割を果たしたと言える。

おわりに

以上見てきたように、岸田吟香の医療活動は時代の激動に触発され、彼自身の医療体験に基づいて始められたものだと言える。まず、西洋宣教師による西洋医学の伝播は、彼に西洋の近代医薬を中国へ導入する意欲を触発した。一九世紀の初期から始まった西洋の勢力のアジア進出、それに伴った西洋の学問の伝播は、日中両国を中心とする東アジアの諸国にとって直面しなければならぬ歴史的な衝撃である。軍事・経済・文化など、各領域において優越の地位を示した列強の圧力にどう対応すべきか。これは当時の日中両国に共通した難題である。幕末期にそのような情勢をいち早く察知した武士たちは、西洋の勢力の動向に常に関心を寄せ、対策を考えていた。宣教師の中国での医療伝道活動に対して、幕末の上海往訪の武士たちも看過せず、一種の警戒意識を持った。したがって、日中の経済提携で西洋の勢力に対抗することを提唱した岸田吟香は、上海滞在中に貧弱な社会医療状況を目撃し、宣教師の伝道医療の事情がある程度把握した以上、その勢力の拡大に対抗する意識が芽生えたはずである。そこで再び上海へ渡って、医療活動を行い、西洋の近代医薬を広める手法をあれこれ試みた。

一方、いわゆる近世から近代への、歴史の転換期で発生した眼病の流行は、西洋の先進的な医薬を日本に導入するだけでなく、中

国にも導入するよい機会を提供した。眼病は現代においてはたいした病気ではないようだが、実際には、近世から近代にかけて、日中両国の民衆の福祉に大きく影響した。それをわが身で痛感した岸田吟香は、眼病の流行を契機に、西洋伝入の処方をもとに近代的な薬品を開発し、日中両国の薬品市場に導入する機会をうまく捉えた。彼は薬品の販売により、眼病を初めとした各種の悪病に苦しんだ日中両国の民衆に救助の手を差し伸べた。この点から考えれば、岸田吟香の医療活動は医学の交流、そして両国民の福祉の増進に大きな意味を持っていると言えよう。

西洋の近代医薬を中国に導入する過程において、彼は中医の開業方式を使用し、中医の権威と名目を宣伝の手法として利用した。一方的に西洋の医薬を宣伝するのではなく、「西医は外科、中医は内科」といった受容側の中医へのこだわりに応じて考案したものであり、異なった文化の環境に異文化を導入する際、在来文化のフィルターを借用する一つの具体例を呈してくれた。その働きにより、伝統医学における日中の連帯感も同時にアピールされたので、一石二鳥の効果があつたと言えよう。

もちろん、「西力東漸」という時代背景を出発点として岸田吟香の医療活動の意味を検討する際、医学の交流、福祉の増進といったプラスの評価を導くだけでは済まない。そもそも岸田吟香の目的はどこにあったのだろうか。経済の利益を追求し、「貿易立国」の抱

負を実現するためなのだろうか。確かに、精錡水を初めとした薬品の売れ行きは好調で、獲得した経済の利益も大きかったが、しかしそれはほとんど荒尾精の漢口桑善堂の中国探査事業に捧げた。したがって、経済の目的より、彼が目指したのは別のものであるに違いない。

中国におけるアヘンの蔓延を、岸田吟香は深く憂慮した。アヘン毒がもたらした各種の弊害による国民の体格と「心質」の変異は、国力さらに国防の強弱と密接に関係している。国土と人口がはるかに日本を上回る中国は、日清戦争での惨敗で、この問題をさらに浮き彫りにした。中国の国力の衰退は東アジアの振興と隆盛の足を引っ張り、「日中連帯」の理想の実現にも悪影響を与える。それに、これは居留日本人の健康と衛生に関わる肝心な問題でもある。アヘン病院の建設の発案、アジア連帯を唱える医療団体の設立への関与、そうした医学領域における「日中連帯」の実践活動に投身した彼の姿勢を考えると、近代の医薬・医療で中国の偏重な医療・保健の状況を改善し、中国を日本の国益に合致するように改造して共に「西力の東漸」に対抗することこそ、彼の目的だったのではないだろうか。

最後に指摘したいのは、一八六八年に精錡水の取次所を設立してから一八八九年に日本へ帰国するまで、岸田吟香の中国における活動期間は二一年にも及ぶが、その後世への波及効果も実に大きかった。

たということである。たとえば、一つとしては医療団体の同仁会の設立を推し進めたこと、また一つとしては仁丹・大学目薬などを代表とする日本薬品の中国への大量進出をもたらしたことをあげることもできよう。後者の経緯と実情は、いずれまた別の機会で考察したい。

注

(1) ハロルド・バルム(丸山仁夫訳)『支那と近代医学―支那医療伝道史』新生堂、一九四一年、七頁。

(2) 近代日中間の医学交流の研究に関しては、中山茂「日中科学技術史における国際関係」吉田忠ほか編『日中文化交流史叢書8 科学主義と医療・公衆衛生』見市雅俊ほか編『疾病・開発・帝国医療―アジアにおける病氣と医療の歴史学』二〇〇一年、郭秀梅ほか「清代医師旅日史鈎沈」『中華医史雜誌』二十九卷二号、一九九九年、真柳誠・高毓秋「丁福保与中日伝統医学交流」『中華医史雜誌』二十二卷三号、一九九二年、真柳誠「近代中国伝統医学と日本―民国時代における日本医書の影響」狭間直樹編『近代西洋文明と中華世界』、二〇〇一年、などがあげられる。

(3) 丁蓄「近代日本の対中医療・文化活動―同仁会研究―」『日本医学雑誌』四十五卷四号、一九九九年、五四三頁―五六二頁、四十六卷一号、二〇〇〇年、二三頁―四五頁、四十六卷二号、二〇〇〇

- 年、一九三二—二〇九頁、四十六卷三号、二〇〇〇年、六一—一六三九頁。
- (4) 愛漢者ほか編『東西洋考毎月統記伝』中華書局、一九九七年、四〇四—四〇六頁。
- (5) 鄧鉄涛・程之範主編『中国医学通史近代卷』人民衛生出版社、二〇〇〇年、三一—四頁。
- (6) *Chinese Repository*, Vol. V, p.456, Vol. VI, p.433, Vol. VII, p.571. Vol. VIII, p.629, MARUZEN Co. Ltd, Tokyo
- (7) 広州市地方志編纂委員会弁公室『近代広州口岸経済社会概況：粵海関報告匯集』暨南大学出版社、一九九六年、八七—七頁。
- (8) 吳義雄『在宗教与世俗之間——基督教新教传教士在華南沿海的早期活動研究』広東教育出版社、二〇〇〇年、三〇—三頁。
- (9) 葉斌『上海早期传教士麦都思』『上海研究論叢』第十一輯、一九九七年、二四〇—頁。
- (10) ジョナサン・スペンス(三石善吉訳)『中国を変えた西洋人顧問』講談社、一九七五年、五八—五九頁。吉田寅『中国プロテスタント伝道史研究』、汲古書院、一九九七年、二五—七頁。
- (11) 李経緯主編『中外医学交流史』湖南教育出版社、一九九八年、二九—八頁。
- (12) 『互相問答』『格致叢編』第二冊、格致書院、一八七七年十月、一四—頁。
- (13) 天野宏は岸田吟香を「西洋薬文化を先取りした明治先覚者」と称している。天野宏『薬文化往来』青蛙房、一九九二年、一〇—三頁。
- (14) 堀哲三郎編『高杉晋作全集』(下巻)、新人物往来社、一九七四年、一五—九頁。
- (15) 小島晋治編『幕末明治中国見聞録集成』第十二巻、ゆまに書房、一九九七年、三一—三二頁。
- (16) 岸田吟香『吳淞日記』(中)——第二之冊——『社会及国家』、一九三一年、八五—九〇頁。
- (17) 岸田吟香『吳淞日記』(中)——第五之冊——『社会及国家』、一九三二年、九六—頁。
- (18) 東亜同文会『対支回顧録下巻列伝』、原書房、一九六八年復刻、一頁。
- (19) 岸田吟香『吳淞日記』——第六之冊——『社会及国家』、一九三二年、二一—六頁。
- (20) 余新忠『清代江南的瘟疫与社会——一項医療社会史的研究』中国人民大学出版社、二〇〇三年、三〇—九頁。
- (21) 鄧鉄涛、程之範主編『中国医学通史近代卷』人民衛生出版社、二〇〇〇年、三三—五頁。
- (22) 天野宏『薬文化往来』青蛙房、一九九二年、一〇—八頁。
- (23) 天野宏『薬文化往来』青蛙房、一九九二年、一〇—九頁。
- (24) 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会『日本眼科の歴史』明治篇』思文閣、一九九七年、九七—一〇一頁を参照。
- (25) 福島義一『眼病と歴史』人文閣、一九四三年、一〇—八頁。
- (26) 井上豊太郎『淋毒性膿漏眼の話』『読売新聞』一九〇七年七月四日。
- (27) 何小蓮『来華新教传教士的早期医学活動』『档案与史学』二〇〇三年一号、六三—頁。

- (28) ジョナサン・スペンス(三石善吉訳)『中国を変えた西洋人顧問』講談社、一九七五年、五七頁。
- (29) *Chinese Repository*, Vol. XIX, pp.279-280, Maruzen Co., Ltd., Tokyo
- (30) 王韜『瀛壖雜誌』上海古籍出版社、一九八九年、一九八頁。
- (31) 鄧鉄涛、程之範主編『中国医学通史近代卷』人民衛生出版社、二〇〇〇年、三三五頁。
- (32) 上海市地方志弁公室『上海衛生誌』上海社会科学院出版社、一九九八年、八九頁。
- (33) 「芝罘に於ける日本の醫士」『読売新聞』一九〇三年一月十日。
- (34) 天野宏『薬文化往来』青蛙房、一九九二年、一一三—一五頁。
- (35) 「經濟協會に於ける岸田吟香氏の演説」『読売新聞』一九九〇年二月八日。なお、蘇州にも支店を開設した話は、杉浦正『岸田吟香—資料から見たその一生』(汲古書院、一九九六年、三九六頁)、劉建輝『魔都上海—日本知識人の「近代」体験』(講談社選書メチエ、二〇〇〇年、一六六頁)などで記述されている。
- (36) 陳祖恩『申報』における楽善堂の広告宣伝活動(一八八〇—一八九三年)『人文学研究所報No.37、神奈川大学人文学研究所、二〇〇四年、二八—三〇頁。
- (37) 岸田吟香「楽善堂謹製各種妙薬廣告」『衛生新編』楽善堂、一八九三年、一頁—七四頁を参照。
- (38) 岸田吟香「上海楽善堂葯房發售各種妙薬目錄」を参照(『楽善堂書目』上海楽善堂書房、一八八七年)。該当書目の紹介は真柳誠・陳捷の「岸田吟香が中国で販売した日本関連の古医書」を参照。『日本医史学雑誌』四十二卷二号、一九九九年、一六四—一六五頁。
- (39) 岸田吟香「楽善堂謹製各種妙薬廣告」『衛生新編』楽善堂、一八九三年、二〇頁。
- (40) 日本医史学会編『図録日本医事文化史料集成第三卷』三一書房、一九七八年、二二六頁。
- (41) 岸田吟香「上海楽善堂葯房發售各種妙薬目錄」を参照、『楽善堂書目』上海楽善堂書房、一八八七年。
- (42) 「醫論」『申報』一八七二年五月二十三日。
- (43) 「論西國醫藥」『申報』一八七三年十二月十六日。
- (44) 「急症倏愈」『申報』一八七五年三月三日。
- (45) 「日本三大書家之一的日下部鳴鶴来滬」『上海新報』一九九一年三月二十七日。
- (46) 「借樓賞雪記」『申報』一八八九年一月八日。
- (47) 「春江送別圖記」『申報』一八八九年三月十日。
- (48) 「摺疊明堂内外全圖題記」『申報』一八八八年十月二十三日。
- (49) 「申報』一八九〇年二月十日。
- (50) 「申報』一八九三年一月二十九日。
- (51) 範文瀾(著)小袋正也、横松宗(訳)『中国近代史』中国書店、一九九九年、二三、三〇頁。
- (52) 劉建輝『魔都上海—日本知識人の「近代」体験』講談社選書メチエ、二〇〇〇年、一六一頁。
- (53) 岸田吟香『吳淞日記』(中)―第五之冊―『社会及国家』、一九三二年、一〇八頁。
- (54) 『朝野新聞』一八八五年十一月二十七日。

- (55) 「吟香翁の支那談」『読売新聞』一八九六年五月十八日。
- (56) 岸田吟香「吸煙阿片に就いて」『薬学雑誌』一〇七号、一八九六年、三七三頁。
- (57) 伊藤博文関係文書研究会『伊藤博文関係文書』(四)、塙書房、一九七六年、三一七―三一八頁。
- (58) 伊藤博文関係文書研究会『伊藤博文関係文書』(四)、塙書房、一九七六年、三二〇頁。
- (59) 東亜同文会『対支回顧録下巻列伝』、原書房、一九六八年復刻、七頁。